
~春風パレット~

やさいとぶどう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「春風パレット」

【著者名】

Z5758F

【あらすじ】

高校生がふたり。ぼくと、ハルちゃん。ハルは不思議な力を持っている。あの頃の君たちの、命をめぐる季節。

— 1 — (前書き)

なんか試しに投稿してみます。前は電腦恋愛とこいつのを書いていたんですけど詰まつたので。つぎゅつと。で、気晴らしに別の話書いてたら案外長くなつた。あと電腦恋愛完結しました。つこわつを。

「ある日、夕暮れにカラスが鳴う

『十一月八日、東京都野方駅で人身事故が発生。少年が特急電車に飛び込み、彼は遺体も残らないほどバラバラな肉片となつた。平日の昼間だつたためにその現場を目撃した人は少なかつたが、駅の近くを通りがかつた女性が線路に飛び込む学生風の男の子の姿を見たという。

少年は線路に立つていた一羽のカラスをかばうようにホームからその身を投げ、次の瞬間にその細いからだは、巨大な鉄の塊に飲み込まれた。カラスも一緒に見えなくなつた。』

きみが、そこにいたのを覚えている。

その子は、ハルちゃんと呼ばれていた。クラスや学校のだれもがそう呼んでいた。けれど不思議なことに彼女の本当の名前を誰も知らなかつた。クラス名簿にも載つてはいるはずだし、出席をとるときには名前を呼ぶはずなのだが、担任の先生も彼女をハルちゃんと呼んでいたので結局だれにもハルちゃんの名前はわからなかつた。それでも、

「ねえハルちゃん、きみの本当の名前はなんていうの？」
なんて聞いた子は一人もいなかつたんだ。

ハルちゃんは特別な能力を持つていた。それが具体的になんのかは、ぼくたちには解らなかつたけれど彼女の周りではいつも不思議なことが起きていた。たとえば、彼女は人のこころを読むことが出来たと思う。あるとき教室で泣いている男の子のそばによつて、しばらく見つめた後、ハルちゃんは何かをささやいた。すると男の子は驚いたように顔をあげ、泣き止んだ。その子は大事な携帯ゲーム機をなくして泣いていたらしい。ハルちゃんは彼の記憶を辿り、ゲーム機が転がつていた場所をズバリ言い当てた。数分後少年は友達と楽しそうにゲームをしていた。でも、ぼくはあの時のハルちゃんを少し怖いと感じた。彼女は男の子を見つめているのではなく、まるで実験動物を観察するかのように無感情にながめているように思えたから。

またあるとき。ぼくは唐突にハルちゃんの気配を感じた。その気配があまりに巨大だつたので驚いたぼくが急いで振り返ると、そこには髪の色素のうすいショートヘアの女の子がいた。また、その子は肌が浅黒かつた。ぼくは「ハルちゃん、君はどうやって変身したんだ・・・」と思つた。なぜならその時ハルちゃんは、ハルちゃんの外見をしていなかつた。彼女は普段、長い黒髪をさらりとゆらしてて、はだは色を失くしたように白かつたはずだ。でも、なんとなくぼくには「やつぱりハルちゃんだな。」と分かつた。彼女

がいつも纏っているオーラがそこにあつたからだ。真新しく純粹で、ここにが騒ぐようなオーラである。

「ハル」の周りには、澄み透った春風が流れていった。

ぼくは、どちらかと言えば教室ではあまり目立たない人種だった。というか目立たたくない。根本的にぼくのこころの中には、ひとを嫌う性質がこびりついていた。だから誰かとかかわる事なんてどうしようもなく煩わしく、どうでもいい事だと思っている。男同士で馬鹿話をして騒ぐなんてもつてのほかであり、そこでぼくは自らのオーラを滅却する。それでも、学校に通っているからには誰かと接触することは避けられない出来事なので、そんな時ぼくは全力で普通を装い、反射的にまともな答えを口走る。その時大事なのは思いきり笑うことだ。いつの間にか、これらは癖になっていた。

ハルは、そんなぼくとは正反対だった。彼女は、きらきらしていた。彼女の行動や発言はまっすぐで、いつも一生懸命なのが伝わった。誰もが彼女をほほえましく見守っていた。ハルは自分を誇張して、変によく見せることをしなかつた。ハル自身も、それが一番輝いて見えるということを知っているかのようだつた。ぼくはそんなハルの存在を信じられなく感じていた。なぜその瞳に写る世界は、そんなにも輝いているのだろう?どうしてぼくは、こんなに醜くくすんでいるんだ?ぼくの手にはけして届かない場所が、彼女のこころにはあつた。

そんなぼくとハルが、これから深く関わり始めていくことになる。それは、高校生のぼくらにとつてあまりに悲壮な物語だつた。けれど小さなふたりにはただ必死で耐えることしか出来なかつた。いつも笑つっていたハルにだつて、色んな悩みがあつただろう。ハルにしか分からぬ世界の痛みがあつただろう。それでもハルは、やつぱ

り笑っていた。

秋だった。木枯らしに吹かれながら、ぼくは夕暮れ道を歩いていた。誰とも話さないぼくは誰よりも早く学校を去ると思いきや、ぼくは美術部に所属していた。まともな高校男児がじつと座つて絵を描くなんてことに興味があるはずがなく、美術部で男はぼくひとりだけだった。しかしそのほうが他人と接触を拒むぼくにとっては都合がいい。俯いたまま、ぼくは放課後みんなと離れて一人絵を描く。しだいに太陽が傾いてきて、赤が美術室の静けさに入り込んでくる。そこでふと窓の外に目をやつたときに見える夕日が、結構お気に入りだつたりした。特に夢や生きがいを持たず、人と関わることに傷ついてきたぼくの枯れたこころを毎日少しだけ、優しく撫ぜてくれた。

辺りのすべてにたつぷりした漆黒をもたらしながら、ゆらりとかまえる巨大な朱色が、ぼくのすぐ近くで目を細めるほどの光を放っている。それがあまりに格好よくて、ぼくはうらやましくなつたんだ。でも、「すこしちがつなあ。」と思つた。それはあの、春の光だ。こんなにも切なげに浮かんでいたつけ?ぼくはいつの間にかハルちゃんの姿を思い出していた。

のつそりとした木々の覆いかぶさる細い道のまんなかを寂しいぼくが歩いていた。

やつぱり、こういう一人の時間が好きだ。色んなことを考えられる。夜になると世界が自分を主張しなくなり、昼とは違つた美しさや感動を、次々にその身に纏いはじめる。ふわり、ふわりと。ぼくは暗闇の色が、好きだつた。

突如、夜の秋空に薄透明の風が満ちた。ぼくの長い髪がはらはらとゆれ、ひんやりとした空気を全身にあびた華奢なからだをふるわ

せながら、目を細めて秋風の軌跡をふと目で追つた。右から左へ、緑色を失くした褪せたような幾千もの葉が、ざわめきながら歌つた。ぼくの世界は夜の闇と、やわざわとした音だけになつた。

なんだか悲しい気持ちになつて、誤魔化すようにほほ笑みをつく。その視線は行く先を探すようにふらふらと進んだ後、暗闇の奥に搔き消えた。

そして思うんだ。僕らが感じじる」とはあまりにも多すぎて、ちつぽけなこの僕には、それらをきつちり表してあげられるだけの言の葉は持ちあわせていない。いつか、誰かが木陰にすわつて笑つてくれただけの葉っぱを茂らせられるだろうか？ いつの日かそんな人間に、なれるのかな。

目を閉じた。ぼくは悲しいのだろうか。いや、そづじやなくてこれは。

ぼくが答えを出す前に瞼がほんのりと赤に染まる。目を開くと、道の端っこで何かが、ぼくやり光つっていた。思わず声が漏れる。

「ハルちゃん？」

ぼくは相当、動搖していたと思う。びっくりして声を出さなければよかつたと、激しく後悔した。しかし彼女は、気づいていなかつた。高校生の女の子が夜に道端にうずくまつて何かしているのは不思議な様子だ。声をかけるべきか迷つた。しかしほくは誰かと道の途中で会うのを強く嫌つた。わざわざ人と関わつて話をしなければならないことが煩わしかつたのだ。だから登下校中に知り合いを見かけても挨拶せず、気づかれないよう遠回りをしたりする。そんなぼくの意識も、ハルちゃんの両の手から溢れだす淡い光の中にあらわすように気がついたとたん、急激に静かになつた。

白い猫だった。ほかの色は何もないまつしろな毛並みが土に汚れて灰色になつていて、泥がこびりついたぱさぱさとした毛が無感情に逆立つて、乱れている。その猫は黒い地面におとなしく横たわり、そしてそのちいさな体を、まるで猫に与えられた汚れや痛みを洗い流すように光が包み、いつまでも巡つていた。

野良猫だろうか。ぼくには一目で解った。その白い猫は、もう死んでいるんだと。

彼女はじつと猫を見つめている。声は出していないけれど、泣いているのかな？なんだか、そんな気がした。やがて、猫の体も光に立つてそれをみつめる。二人の顔がきらきらした光にやわらかく照らされて、ふんわりとした桃色やきらりとした黄色や、切なげな薄緑色に染まつた。どれも儂げな色が、次々に移り変わる。そしていつしか白猫は光とともにわかれ、ふつりふつりとちいさな無数の光の粒となつて、黒い地面を離れて楽しげに浮遊をはじめる。数え切れないほどの光の粒たちは、巨大な星ぼしの浮かんでいる宇宙の果ての方向を目指し、猫が確かに生きたこの世界を名残惜しむように、ふわふわと辺りを漂いながら夜空へと進んだ。今ある世界の闇や、空氣や、僕らの思いを大切そうに拾つてしまいながら、昇つた。彼の心は笑つている。ぼくにはそれらが、ちゃんと解つた。そしてそれは、ぼくの隣にハルちゃんが居るからだということも、たぶんわかつた。白銀の色を放つ光の玉は透きとおついて、僕たちの頬を照らす白い光が、だんだんと薄くなつていいく。猫はもうぼくらを振り返らない。いくらかの空間や時をへて、彼の光は夜の星に届き、ぴかぴかした惑星や衛星に混じつて、溶けた。ハルちゃんとぼくはふたりして顔をあげてぽかんと口をあけながら空を見上げていた。降つてきそうな満天の星たちが、今日はなんだかやけに、

「きれいだ・・・。」

ぼくの咳き。だけどハルちゃんは、もういなかつた。

そして世界は、墨を流したように暗い。

黒に溶けたカラスが、何も語らず彼をみつめたまま、少年の傍に佇んでいた。

次の日。

ぼくは昨日の帰り道に起きた短い時間の不思議な出来事は、誰にも話さず黙つておくことにした。まあ、例によつてそれはつづらいの意味をもつていたけれど。いやな授業の間はずつと昨日のことを考えて過ごした。まるで、よくあるお伽話のように天に召されていつた白い猫。そして、ハルちゃんのこと。あのぼつと明るい光を見ていた時間はいつも色んな面倒くさい考え方とか感情とかが消失してしまい、自分が今居る現実世界から離れて異世界に浮かんでいたような気分だった。そのせいか、今でもあれが昨日の夜、ぼくが実際に目にしたものだという確信がもてなかつた。お昼休みのことだつたか、そんなぼくに、ハルちゃんが近寄つてきた。中庭の隅つこのおおきな石の上に座つて、一人お弁当を食べていると、いつの間にかハルちゃんがすぐ傍にいた。ためらいのない動作で隣に腰掛けると、驚いているぼくを尻目にこんなことを喋りだした。

「猫はね、自分の一生の長さんんて気にしないの。自分の生きた猫生が、本当に楽しかつたつて思えたなら、それが一番なんだよ。」

聞けば、あの猫はまだ八歳で、白血病にかかつて死んでしまつたそうだ。彼女がいつも公園で世話をしていた野良猫だつたらしい。どうしてぼくにそんなことを話すのかと言うと、やつぱり昨晩の出来事は本当にあつたということだ。そしてまるで信じられないようなハルちゃんの力も、確かに実在しているということ。それを確かめたくて彼女の方を向くと、きらきらとどこまでも奥深く続くような黒目が、ぼくの瞳をとらえた。

不思議な香りのする柔らかく厚みのある風が、誰もいない小さな中庭を横断する。少し居たまくなつて前を向いた。渡り廊下の向こう側には、ひろびろとした校庭があり、元気に生徒たちが走り回るぽつんとした影がいくつもみえて、笑い声が小さく響いてくる。そのさらに向こうには、両の側に高く伸びた校舎にはさまれて白と青が輝くきれいな雲空が覗ける。空に向かう校舎の窓からは、風にゆれる教室のカーテンと、身を乗りだしてどこか遠くを見つめる男

の子の姿がみえた。ガラスに空の模様が映りこみ、世界はどこまでも広がっているかのように思えた。

長い漆黒の髪が、ぼくのすぐ近くで風に吹かれて静かにはためいていた。

「ハルちゃん、きみは何者なんだ？」

返事はなかつた。

彼女はただ空を見上げて、わずかな太陽の暖かさをのせた秋風に吹かれながら、目をほそめた。

その日からだつた。ぼくとハルが一緒に居るようになつたのは、ぼくらは徐々に打ち解けていった。ふたりが会うのはたいてい中庭で、決まって、ハルちゃんの方からぼくに近づいてきた。なぜかわからぬけれど、いつも笑つている彼女のそばにいると、人を嫌うはずのぼくが、誰かと一緒に居ることの喜びや安心を感じた。ただ意味もなくふたりで並んで座つているだけのときもあつた。それでもぼくはハルといれるだけでうれしかつたし、きつとふたりとも笑つていたと思う。ハルはぼくの脆く、たくさんの恐怖を味わつてぼろぼろになつた心を許すことのできた初めての友達だ。

おしゃべりもない、ふざけあうこともないけど、こんなぼくやハルだからこそ、ただ傍にいられることの温かみを知れた。

今日は朝から曇つていた。ぼくは一時間目の授業を抜け出して、中庭の石に体育座りして身を縮めていた。数学は苦手だつた。でも、自分は理系を選択しようつて思つてゐる。ぼくの将来の夢は博士になることだつた。ロボットを造るんだ。そう、遠い未来に誓つてからぐらに経つのだらう。ぼくはなにも出来ず、なにもしないまま

高校生になつてしまつている。今ではもう、ぼくはこのつまらない世界に胸の躍るような幻想を抱くこともなくなつた。世の中を見限つた。勉強もできず、人と関わることも出来ないぼくがたつた一つ大切に守つてきたものさえ今ではなくしてしまつていた。そして、世界もまた、ぼくを見捨てた。だからぼくは今では人々の流れに押し流されながら、過去の夢みる少年の日々を思い出しながら、なんとなしに道しるべを選んでゆく。そんなぼく。

ハルちゃんが隣にいた。体育座りで中空に視線を馳せていた。いつのまに来たのかなんてことはもうどうでも良かつた。そんなぼく。「ああ、こんなぼくはもうだめだ。」

唐突にそう感じた。興味をもつた様子でハルちゃんがぼくを見るのでなんでもないよ、といった風に曖昧に笑つておく。すると、彼女は「」く自然に手をのばし、掌をぼくの頭においた。また何か不思議なことをやらかすのだろう。ぼくはいつものことだと思つて、じつとしたまま考え方を続けた。ぼくが脳内で悩みに苦惱し、本音をぶちまけるたびに彼女はくすりと笑つた。それが少しばかり続いたところでいくらぼくでも、「ああこりや頭、覗かれてるな。」と気づいた。そのとたんハルちゃんは少し申し訳なさそうに細い指を離した。しかし彼女が本当に申し訳なさを感じていたのかどうかは定かじやなかつた。彼女はひざに手をついたまま体をかがめて、おもしろそうにぼくの表情を眺めていたからだ。だけど、嫌な気はしなかつた。なんだかハルの笑顔を見て、ちょっとばかり胸の鼓動がおかしなリズムを鳴らしてしまつた。すぐに思い浮かべた単語を打ち消す。だめだ、ぼくにそんな権利はないんだ。ぼくみたいな人間は誰かと深く関わつてはいけない。もちろんハルちゃんとだつて、今はこうして一緒に居れるかもしけれど、いつかはぼくの本性に気が付く。ぼくの醜い部分に触れ、恐怖し、軽蔑の眼差しをぼくに突き刺すに違いない。

悲しい気持ちになつて彼女の存在をしつかりと確かめるように目線を横に馳せる。ハルちゃんの長い黒髪がゆつたりと垂れて、冷た

い石にそつと触れていた。彼女は灰色の石の心さえも知っているのだろうか。それなら、ぼくの心の全ても知っているのか？突然、強烈な脱力感に襲われる。葉っぱがはらりと落ちる。そうだ、これは絶望だ。まずい、ここから逃げなくちゃ。ハルちゃんとの全てが音を立てて壊れる前に。

ぼくはいきなり立ち上がり猛然と走り出した。中庭をでた辺りで何食わぬ顔で「冗談、冗談。」などといつてハルちゃんの所に戻るかという強烈な感情が生まれたが、ぼくはそれを振り払つてわけもわからず走つた。

風が冷たくなってきた。ハルちゃんは少し目を伏せて、ぽんつ、というはじけた音とともに消失した。近くの木からばさばさと慌てたようにカラスが飛び立つ。

ぼくが教室に戻ると、ハルちゃんはすでにいた。なんとなく後ろめたい気持ちがあつて目を合わせないように注意しながら椅子に座る。

よし、次の授業は理科だ。少しだけ嬉しくなつてぼくはノート開く。シャープペンシルの細かいタッチでびつしりと描かれた落書きが空白を埋め尽くしていた。どれも、ぼくが将来造りたいと思うロボットたちのデザインだつた。もちろん、こんなものお遊びだ。ただの現実逃避に決まっている。ぼくは急いでページをめくる。

窓際の、一番後ろの机が、ハルちゃんの席だ。その時彼女の机の上に、乱れたようにカラスの羽が落ちていたことに気が付いた生徒はいなかつた。はつとしてそれを見つけると、彼女は頬の紅潮した顔を、焦った表情に変えた。すばやく吹いた風が、開け放した窓を通り抜けて教室を冷やし、一枚の漆黒の羽がふわりと浮いて教室の空中に舞い上がる。それは生徒たちの頭上をひらりひらりと泳いだあと、狙い済ましたように少年のノートの上に舞い降りる。雑に描かれた丸みを帯びたフォルムの单眼口ボットが、薄黒く陰る。

ぼくは、戦慄した。

田をぎゅっと閉じて、何かを振り払うかのように頭をふった。突然感じた邪悪の香りに、心臓がハイテンポで動作している。しかし、それは一瞬のことだったので、ぼくは気のせいだと思ったことにした。このカラスの羽は窓の外から風に運ばれてやってきたのだろう。そのまま些細な出来事として忘れることにした。感情をすくえない教師の声が再び耳に入つてくる。そしてそのまま、まるでいつもと同じ束縛された一日が過ぎ去る。

夕暮れの並木道をいつものようにぼくが歩く。辺りには夜の色が満ちていた。今日は美術部はない。それでも最近は日が落ちるのが早くなってきて、下校する時間にはもう太陽が傾いていた。空を覆うように立ち並ぶ建造物の影の向こう側に煌々とした明かりが被さつて、散らばっていた。太陽が別の国へ仕事をしに行こうと、ぼくらの生きる舞台から退場していくとしている。ずいぶん早い閉演だな。なんだかぼくらの人生までも、短くなつたようだ。そんな薄情者に、

「ばいばい、また明日。」

なんて手を振る気にはなれなかつた。

田の端に人影をとらえた。道に脇に植わつた木に寄りかかつて、ハルちゃんが立つていた。ぼくを見つけると、嬉しそうに顔をほころばせながら、

「一緒に歩こうよ。」とささやいた。吐息が見えた。その様子がだいぶ寒そだつたので、か細く色白の彼女を、少し心配してしまつた。

ぼくが急いでうなずくと、少し安心したように丸めた両手に大きく白い息をはきだして、ハルちゃんがぼくの左側にかけよつてきた。ぼくは、彼女と同じ速度になるように気をつけて歩いた。それとも、ハルちゃんが同じ歩幅になるように歩いてくれたのだろうか。ふたりはおんなじ速度で、まっすぐな道をゆっくりと歩いた。

「なぜ君は、ぼくと一緒にいてくれるんだ？」

冷たく静かな空氣を乱してぼくが声を発する。それはぼくにとつ

て、なぜだか強く勇気のいる質問だった。そしてきっと彼女にとつても、どこか核心を突いた問いかけであつたに違いない。ハルの目が、赤く染まつたように思えた。

少しの間の静寂。もうすぐ冬がやってくる。

そのとき、たぶん彼女はこう言つた。

「人は醜いと思うよ。たくさん汚いものを隠し持つていて、それは上つ面で言つている奇麗事なんかよりも、もつと一杯あふれているんだ。だから、たまに自分のことがどんなに頑張つてみても好きになれず、ただ苦しみに堪えるつらい時間を過ごしたりもする。だけど、私達みんながそれを持つてているのだとしたら、誰もが必死に抱えているものなのだとしたら、きっとその醜さは「人間」つていうことなんじやないのかな。」

そこで大きく息を吸う。語尾が震えていた。

「だから、いいんだよ。私たちは大丈夫。きっとこれからも生きてゆけるよ。」

彼女の顔は夜の闇に紛れてよく見えなかつた。ぼくはただ一言、

「うん。」とだけ声を絞つた。

ぼくは彼女の言葉の意味に打たれていた。ハルは、苦しんでいたのだろう。自分の嫌な部分を見つめて苦悩し、みんなの前では気丈に振舞う。ハルだって、人だ。十六歳の女の子なんだ。一つの苦しみや憎しみさえ持たないなんてこと、あるわけないだろ？。それなのに、ぼくは・・・。自分が、ひどく傲慢で低脳な動物に思えた。そして、それが問い合わせになつていないということも気づいていた。これが、答えではないということ。しかしこの時、ぼくは、彼女の言葉の本当の意味に気が付いてはいなかつた。

その細い道を数分進むと、神社の敷地の中にである。小さな鳥居をくぐると左横に狛犬の後姿があつて、そのもう少し先には低い階段と一回り小さい狛犬が対になつて番人のように入り口を見張つていた。階段を下りたところでぼくらは別れると、ぼくは左、ハルちゃんは右の狛犬の前を横切つて帰つた。のろのろと歩いたせいか、透き通るような虫の声がどこからか聞こえてきている。俯いて歩くぼくの真上には荘厳な星空。視認しなくてそのまま圧倒的な存在感を誰もが感じてしまう。いつやつて世界の大きさを知るたびに、宇宙はぼくに興味がないんだと理解する。誰からも見捨てられ、ぼくはいつも独りだ。そのはずだった。今までそのはずだったのだ。しかし今は、ぼくの隣にハルちゃんがいる。いつかお互に悲鳴をあげるような大きな傷を残してぼくらは決裂するような、なんだか悲しい予感がしたけれど今はどうでも良かつた。それほどまでに、他人の存在というものにぼくは救われていたんだ。

冬が訪れた。

昼間だといふのにどんどんよりした灰色の雲が空を覆つて、世界はまるで閉じたように薄暗い。そんな景色にうんざり顔の、くたびれた様な人々を、攻撃的な寒さが襲つていた。そんな朝の星空には、小さな日の光だけが世界の良心に思えた。今年も終わりが近い。最近では東京だというのにちらほらと雪も見かけるようになつて、なんだか時が進んでいることを感じさせられる。雪の粒はゆっくりと下へ向かつて進む。どこか違う場所へ行こうとも考えず、空の高いところで生まれたときからずっと同じ道のりを旅して、最後には僕らの足元で消え去つてしまつ。それでいいのだろうか。彼らはそのいいのだろうか。もしそれが抗いようのない地球の重力だというものの仕業だとしたら、同じくこの星に生きる僕らも、抗いようの無い時間という力に流されているのかもしない。そう考えるぼくと、

隣を歩くハルちゃん。今日はもう冬休みなので学校はなく、休み前の学校でのある日ハルちゃんと、冬休みになつたら一緒にどこかに行こう、と約束したことを朝思い出し、暇なのでその約束を実行することにした。彼女は学校に居るときはいつも制服姿である。ぼくらの通う高校は服装自由なのにも関わらず、いつでも濃紺のブレザーを着てきている。そんな格好しか見たことのないぼくは、漠然と今日のお出かけも制服姿で来るのをおもいつかべていたのだが、学校近くの神社で待ち合つたとき彼女をみて、ちょっとばかり驚いてしまつた。なぜなら、ハルちゃんはやっぱり制服姿だつたのだ。しかし、まあそれでこそハルちゃんだ、と言うべきでもあるとも思った。そんな彼女が可愛らしい。すこし照れたように手を振つていた。しかし、思い返してみれば友達と一緒に外出なんていつ振りだらう。はるか昔のような気がする。きっとぼくも緊張した笑いを浮かべていたに違いない。

こんなふたりだったので、特に行くあてもなくふらりふらりと歩いていた。昼の雪が眩しかつた。冷氣から身を守るように人々は家の中に引きこもつていて、商店街の通りには、だあれも居なかつた。息の詰まりそうな外気に数分当てられると、ぼくもだんだんと外出したことを後悔し始めてくる。なんとなしに、錆びれた商店街の近くにある駅に向かうと、まばらに人が見えるようになつてきた。通りすがる人の顔は皆凍えていた。心中で「寒いのにどうもお疲れ様です。」と声をかけておいた。そんな気持ちになるくらい、何かに耐える表情を誰もが貼り付けていた。こんな風な小さな悲しみが、一日の間にいくつか集まると、世界はなんて悲しいのだろう、と思うことがよくある。ぼくや誰もの周りの小さな世界には、いつでもぼくらの腕をするつと抜けていくような苦しみで満ちている。ぎゅうぎゅうと溢れていのだ。それは悲しいほど確かにことなんだ。ぼくの横で、ハルちゃんがびくりと体を震わせて、何事かを呟いた。早口だったためになんと言つたのか聞き取れなかつた。背中を丸ませて呻いていた。顔を覗き込むと額には冷や汗が流れていた。

「大丈夫?」どうしたんだろうか。

無理やり辛い顔を崩そと、必死になりながらいつ。

「うん。ちょっと休ませて・・・」

ハルちゃんの手を引いて商店街の古びた喫茶店に入った。店の奥地の空いている席を見つけて、そこに向かい合わせて座る。お店の中は異常に暖房がきいていて、すぐに頭がぼやける感覚に襲われ体が火照った。

「背中が・・・」

突然彼女が呟く。おそらくぼくに向かつて発した言葉ではなくて、耐えれずにぽろりと漏らしてしまったような言葉だった。

「背中が痛むの?見せてみて。」

自分の脳内で何事か考えていたようだつたがはつとして困った顔になつたが、すぐさま明るい調子で取り繕つた。

「ううん。なんでもないから。あたしはもう大丈夫だよ。平気。そうだ、今日どこに行こうか。そういえば全然決めてなかつたね。」

「いいから。ここ人いないし。」

ハルちゃんは強くためらつた後、ぼくの心配そうな、どこか怪しむような視線に抵抗できなかつたといった様子で、ゆつくりと体の向きをかえて、いすの背もたれに腕を乗つける格好になつた。長い髪も前に垂らす。ぼくは物凄い力で心臓が跳ねたのがわかつた。後姿を見ると一層、そのか細さのわかる女の子の背中に、抜群にするどい刃物で切り裂かれたかのような真つ赤な線が三本引かれていた。脱いだブレザーの下のシャツがそのような形に切れており、血がそのままの濃度で背中全体に滲んでいる。もうすぐ裾の部分に滲んだ血が到達して、ぽたぽたと垂れ落ちそうだ。すごい量だ。早く止めなくては。しかし、うまく行動できない。こんなもの、普通に生活していればたいていの日本人は遭遇することのない光景である。ハルちゃんに強く言つておいて、ぼくの方が涙がでそうだ。おろおろと、

「大変だ。どうしよう?これは大変だ。」

とかいう吐きそうになるくらいどうでもいい事を口走りながら、一方で自分が何をしゃべっているのかわからない状態の目玉だけになつたぼくが一心不乱にその惨劇を見つめているだけであった。ハルちゃんは痛みを感じていないのだろうか？傷は細いが、深くまで切れ込んでいて、見ているだけでものた打ち回りそうになる。そんなぼくの情けない姿を横目でみて、ハルちゃんが息だけを吐くように笑う。やはり苦しそうだ。しかし、・・・あれ？折れそうな背中に残酷に刻まれていた傷が、いつの間にか浅くなっている。かつんと正常な意識が戻る。急いでズボンのポケットに入っていたハンカチを取り出して大雑把にハルの体についた血液をふき取り、着ていた上着を脱いでハルちゃんの体に巻きつけた。そうして向かい合つてコーヒーを飲みながら少しばかり休んでいると、もう血は滲まなくなつた。ぽつりと、ハルちゃんが口を開いた。

「「めん。もう一緒にいられない。せめて今日だけでも、君と二人で楽しい思い出を作りたかった。あたしにはもう時間がないから。だから・・・。でも、大丈夫いつかきっと戻つてくるから。」

そういうと、店の扉があいて外のひんやりとした風が吹くのと一緒にその姿はぼくの目の前からなくなつた。

遠くから人間たちの話し声が聞こえてくる。小さな喫茶店のはじつこに、僕という人種がいた。他のどの人間とも交わることの無い、「僕」が一人いる。

僕を耐えがたい孤独が襲い狂う。目のくらむような無限世界にただ一人になつた。やがて守るように僕の心を取り巻いていた春風が薄くなつていき、完全に去つてしまつと、薄く脆い心から大切なたくさんが大量に零れ落ちた。鼓膜を攻撃するように激しく音を立ててぼろぼろと足元を転がる。死んだ目に黒を宿しながら急いで拾おうとしたら、かがんだ拍子にまた幾つかなくなつた。涙も何粒か落ちた。これでもう涙は枯れはてた。ありつたけの雲が落ちた心たちに当たつてはじけ、透明が僕を見た。僕も写つたその姿を見る。そこには他の何も無く、ただそれしかなかつた。

その瞬間余りの衝撃に絶叫した。その叫びは一瞬に僕を切り刻んだが、「他の人間」たちには聽こえなかつた。僕は、気付いてしまつた。

折れそうな背中をしているのはこの僕だつた

残酷すぎる傷を背負つていたのはこの僕だ

じゃあ、何のためにハルちゃんは傷を負つたのか
この僕を、守るため

誰でもなく、僕

どうしようもない位ダメなで、ダメで、そしてダメな一人の少年
彼は心に傷を負つてゐる

君は知つていた

僕がたくさんの人間の中で泣きそうになりながらいつも誰かに助けを求めていたこと

本当は、どうしようもなく寂しかつた、他人を嫌いだと言つてせ
めて自分にだけは小さく強がつていた
人が嫌いなんじやなくて、嫌われるのが怖かつたんだ
僕と言う人間の奥底の薄汚れたところに心を隠し続けた
そうすれば僕は大丈夫だと思つた

本当の僕を知られずにすむ、嫌われずにすむ、僕は、一人じゃない
大丈夫、生きてゆけると、何度もくりかえした
いつしか心はどつかにいつてしまい、あわてて見つけたそれはも
うぼろぼろだつた

そうしてから、誰も心を許せる人間が、頼ることの出来る誰かか
いないことが本当に一番つらいんだと知つた

なによりも孤独が、怖かつた
人は一人では生きれない

他の誰かがいるから人なんだ

みんながいて、それで僕たちは人間
やつと、人間だ

じゃあ、それならば、こんな僕の生きる意味とは

ぼくをかばつて、もう限界だった彼女

ぼくが、君を傷つけていた

何かにすがりついたけれど、いつも傍にいた君はもういなかつた

僕の生きる意味。それはいつの間にか君だった。気付いたら、僕のそばに君がいてあの細い腕でそっと支えてくれた。そういえば、君はあの時泣いていたね。赤と黒がよりそつていた夕暮れの細道で、確か僕はこう聞いただろ。

君は、どうして僕と一緒にいてくれるんだ?と。

僕は君に救われていた。なぜ教室で誰より輝いていた君が僕の傍にいてくれるのか、いつも不思議に思っていたけれど、それでも僕にとつて君は他の全てよりも必要とする誰かだつたんだ。

心が見えてしまつ君にはずつとわかっていたんだね。僕と歩いている間、泣き出さないようになれていたんだろう?僕が君に質問して、君が顔を上げたとき、目を真っ赤にしてたつ。でももう、そんなことしなくていいんだよ。僕は、もうすぐこの世界からいなくなってしまう。ああ、でも僕がいなくなつても、きっと君は僕みたいいな誰かを見つけて優しく傍にいてあげるんだろうね。君は、いつも自分ではなく誰かのために生きた。

でもね、ハル。

君はもうそんなことはしなくていい。僕があの時の言葉の意味に気が付いたのはずっと後になつた今頃だった。そのとき君は、たぶんこう言った。

私達みんながそれを持っているのだとしたら、誰もが必死に抱えているものなのだとしたら、きっとその醜さは「人間」ってことなんじやないのかな。

僕がその言葉を初めに聴いたとき、僕はそれは君の事を思つた言葉なんだと、そう感じた。僕は、やっぱりダメなやつだったよな。僕の葉っぱはまだ生い茂つた緑色ではなくて、そして折れそうに細い茶色の木の枝にぽつんと小さく蕾をつけていたんだろうな。寂しげな蕾だつたと思う。

だけど、ハル。僕は気付いたよ。だからなんだか本当に申し訳ない気持ちなんだけれど、だけど今度は、君の春風に育てられた青い葉っぱをみせてあげたい。感謝の、言の葉を君に贈りたい。

僕のことを想つた言葉だつたんだ。僕の苦しみを知つて、君は声を震わせながら言つた。もう、本当にどうしようもなく馬鹿だよなあ。こんな、こんな僕のために・・・。謝罪の言葉なんかじゃなくて、きっともつと大切な言葉なんだろう。まだどつか拙いかもしない。君が僕にくれたたくさんに比べたらあまりにも足りないのかもしね。でも僕は全力で言つよ。僕の青々と茂つた葉を歌わせてやる。

ハル、ありがとうな。ごめんなんて絶対言わないぞ。ありがとう。
ハル・・・・・・。心から、ありがとう。

君はもういいよ。これからは自分のために生きな。君の人生だ。自分のためにその綺麗な心を使いなさい。でもね君のそのきらきらした心に触れて救われる誰かはきっといると思う。だからその時は、あの時の日々みたいにその人の傍にそつと寄り添つていていくください。そして君は普通の女の子のように自分を想つて、自分を大切なものにしてあげて。そうすればその子も僕にみたいに悲しい気持ちにはならないはずだから。だから・・・・・・。

ああ、ハル・・・・・・。もうすぐよなうだよ。君とも、この世界とも。

あの時君は、どうしていなくなつたんだ・・・・・?

その日を境に、ハルはぼくの傍から消えた。

冬の空を泳ぐカラスはどこか寂しげだ。世界はなにもなかつた。

— 1 — (後書き)

今回もなんも続きを考えていません。それにしても、僕は主人公と自分を重ねてしまう傾向が

圧倒的に強いのですが、今回は少しまずいです。

あと電腦恋愛のほう見てください。完結編を載せたので。出来れば・

—2—（前書き）

この文章と一緒に投稿した、緑丸はじめの作品があるので見てみて
くださいね。出来れば。
暇でお人よしでおばかさんのあなたつ
また死にたくなってきた・・・。

例えば、僕がよく考えるこんな言葉がある。あんまりにも生きるのが辛くなつたとき、こう呟く。

世界は、何も変わらなければいい。

世界が終わる必要なんてない。終わらせるなんてこともしなくていい。だから、せめて世界は何も変わらないで欲しい、と。そうすれば何も苦しくない。僕らは悲しまず生きて、そして、僕らは何も無いところから作り出すことができる。僕らは想像し創り出す。そうやって生きていくこと、神様に言ひてみるのだ。でも、ぼくの小さな世界の神様は一度も、聞くことすらせずにへらへら笑いながら僕を眺めてた。そうだ、ぼくは主役なんかじゃなかつた。

冬休みが終わり、学校が始まつた。もうすぐ高校一年生もおしまい。

とたんに色を失くしてしまつた世界で、僕はハルちゃんと日々を思い出している。君はもう僕の生きる世界にはいないんだろう。今頃、宇宙のどこら辺で、何をしているのだろうか。それとも、君の事だから僕なんかには想像つかない不思議の国で冒険でもしてるのかもしれない。そうだといい。楽しく生きていたらい。僕のせいでも君をどうしようもなく傷つけてしまつた。もう謝ることも償つことも僕には出来ない。いや、もしかしたらあるのかもしれない。君が僕に望むこと。だけれど、ハルちゃん。僕はまた一人になつて

しまった。もう何をすることも出来ない。一つ前の季節と同じように、僕は絶対的な何かに流されながら何とか今の生活をこなしている。ハルちゃんと二人だった頃は何でも出来る気がしていた。世界と向かい合って抗うことも出来ると、そう思っていた。だけでもう無理だ。一人だから。絶望的なほど、僕は一人だ。君が隣に居たことを思い出してしまうから、どうしようもなく独りになってしまつ。実際に、こんなことを考えていたのだろうか。僕の頭は思考回路のレールがどこかがずれたようにぼやけていた。あの日からずっとそうだ。

生きるための言葉が、見つからない・・・・・。

ああ、そうだ。まだ春は来ない。枯れ切った木々がそこら辺に打ち捨てられているだけの風景。よれて落ちた葉っぱはもう死んでいる。

そういう風なことをずっと考えていた。いつしか、周りを完全に拒絶する僕のオーラが周囲の人間を冷やしていった。冷たく、冷たく、僕の心も。

ぽかぽかとした天気のあの頃の、僕が生きたそれらは煌びやかな毎日を見えただろうか？恵まれて、満ち足りた高校生活だと、僕のことを羨んだ誰かが居たのだろうか。うん、確かにそうだったに違いない。

僕への虐めが始まった。

その日、僕は泣くことを失った。そんな物を持つていては、これから僕は戦い抜くことは出来ない。だから特に迷うことなく大切なそれを捨てた。いつものことだろう？

ある日僕は深すぎる絶望を知った。それが追いつかない速度でくずれ折れるほどの恐怖が背後を次々につらぬいた。

あの日、僕の世界はグロかつた、エロかつた、惨かつた、エグかつた、酷かつた。それでも、僕は生きていた。悲しくなつた。

いつかの日、僕は優しい死に声をかけられた。どうしようかと迷うことなく僕は恐ろしい生に脅されたのでしがみついて離さなか

つた。

それからの日、それでも僕は学校に行つた。何故だろう。たぶん、それだけが僕の生きている証。誰からも存在を否定され蔑まれているぼくの、ちっぽけで尖った強がり。もしかしたら、気付かないうちにもう心は死んでしまっていたのかもしれない。もしかしたら、僕はもう、何かを感じることが出来なくなってしまったのかもしれない。そんな適当なことを思いながら、僕は意識が超スピードで零れ落ちるのを意識していた。少しばかり先に腐った生き物たちが爆笑しているのが見える。あれ、おかしいな・・・・・。春が居た。それが見えたんだ。今度はいつもと違うようだぞ。こんな僕が希望を連れてくるなんて。

曖昧な明かりが集まつて照らす、白い夢の中だつた。ハルちゃんが何かを必死に探している。でも見つからない。そのすぐ背後に黒いカラスが立つていて。彼女はそれに気が付かない。あたたかな夢だつた。楽しかつた。しかし、どこかが心にすつと引っかかつた、そんな気がした。

とりあえず今日も生き延びたので帰宅する。真つ暗な景色が残さず僕を包んで守ってくれているようで心地いい。いつもの、くねつた細道を歩いていた。別に、ハルちゃんと出会い不思議な体験をしたこの道に何を思うわけでもなかつた。のはずの僕の心がいきなりに突き動かされる。何もなかつたふりをして自分を押し沈めようとしたけれど、大量の波紋を描いて淵から零れ落とされた零は飛び跳ねてコップに戻ることをしなかつた。投げ込まれた大きな葉っぱが心をばしゃりと切り裂いた。道の端、樹の下に 誰かがいる。

人の影の輪郭がはつきりと分かつた。いいや、違う。何かに期待して良かつたためしなど今までに一度もないだろうが。再びあの時のような絶望を味わうだけだ。思い切り顔を背けて道を過ぎ去ろうとした。恐怖すら、感じていた。

そのとき世界には、色々あつたはずなのに。月とか風とが夜とか

口だった。

「す、すみません。助けてください。」

「こいつ、泣いているのだろうか？僕はそう思った。

「携帯電話をもっていますか？」

「僕は微動だにしない。反応しない。

「あ、あのこの子が・・・。」

「この...？ああ、いま気が付いたが彼女は両腕に犬を抱いている。

小型犬だ。チワワ・・・だろうか？そんなのがいたつけな。

「こ・この近くで、動物病院はどこにありますか？」

「ふきだすのを堪えた。しかし、そこでようやく状況を悟る。

「し・しんじやつたんでしょうか。ぐつたりして動かないんです。早くしないと・・・。」

おそらくだが、暗闇のなかで僕は歪んだ笑いを浮かべていた。

「た・たすけてくださいいいい！」

彼女の叫びをつづつたく思つた僕はそれを遮りたくて、早いところここから離れようと思い、とつせに「んなことを言つた。

「それ、もう死んでると思いまますよ」

「酷く、冷静に。」

羨むほど、落ち着いて。

そして微塵の無駄も無く背を向けて立ち去つとした。

「・・・ん？」

ひとりとひとりの周囲の時間が静止していた。

「・・・ぱたり。

「・・・雨・・・？」

「・・・。」

「ぱたり・・・ぱたり。」

「・・・涙・・・。」

なにが起こったのか、良く解らなかつた。気持ちが悪く胸を抉る
ような奇声が、濃い直線を描いて僕の方へ飛んできたとおもつたら、
いきなり強い衝撃が僕の頭蓋に衝突した。

赤い。

血？

それが吹き出て眼前に飛び散るのがなんとなく解つた。
それがもう一回起こつた。

また起こつた。

おい、これは赤すぎるよ。

まるでお風呂に浸かっているみたいにあつたかい。
いつまで経つてもそれは止まなかつた。

途中で思考や身体の感覚が闇がかり始めたが、だんだんわかつて
きた。

僕は死ぬ、かも知れないと思つた。

生命の停止という感覚が近くにあつた。

学校の奴らにやられているのとは圧倒的な差異があつた。
何をおもしろむでもなく楽しむでもなく。
それはただ僕という存在を破壊するために行われていた。
何度も何度も繰り返していた。

仰向けに転がっている僕はようやく見れた。
赤いしぶきに染められて鮮やかになつた月や風や夜や紫の雲たち
を。

肉体の痛みは、僕を狂わせるでもなく氣を失わせるでもなく、ひ
たすらに僕の全部を責めた。

解つたよ。悪魔は、僕だつた。ぼくにとつての悪魔は他人ではな
く、ぼくの心の弱さが世界に生み出した罪悪だ。悪魔を造り出した

のは他人でなく僕だった。僕は自分に突きつけられた痛みに媚びて、他の何かを敵に仕立て上げる事で、憎むことで、汚く罵ることで、自分を綺麗で居させようとしたんだ。たくさんの重なった苦しみに耐え切れず、僕は逃げた。僕の心の弱さが、僕を今壊している。彼女の魂を千切つた言葉や、目を見開いた犬の表情から、ただ逃げたかつただけなんだろう。ただ、怖かつただけなんだろう。そんなちっぽけな理由で僕は何かに対しても強がつてみせ、偽りの心を貼り付けて、戦うことを止めてしまった。他を攻撃し加害者になることで、全てを収めようとしてしまった。そんなことに何の意味があつたんだろう。やっぱり、弱い人間が強くなろうとしたってそれは無理なことだつたんだ。

起きたことは何も後には戻らない。

謝罪の言葉はただ自分を逃がしているだけ。

つくつた笑顔は自分を他から守るだけ。

感情の無い声はただ誰かを苦しめるだけ。

「うぎゃあああああああああ

ごんつ

ごんつ

ごんつ

じひやつ

じひやつ

じひやつ

じひやつ

・・・・・

じとり。

荒い息遣いの音。

息を呑む音と、何かに怯えたような叫び声。はしるよつた足音。

遠ざかる。

風。

葉っぱ。

・・・・・。

また、静かになつた。

さつさと、何が違つてゐるだらう。いや、何も違わない。世界は僕なんてどうでもいいんだから。僕は世界なんてどうでもいいんだから。

木々に語りかけた。悲しい唄なんて歌わなくていいんだよ。だって、いつものように空には蒼く明るい月が懸かつていて、夜は心地いい影を広げて風を吹かし、それと一緒に歌う君たちがいるじゃないか。なにも、悲しくなんかない。それなのになぜ、君たちはそんな風に揺れているんだい？

開け放した窓からこの景色を美しいと感じて、何かを想いながら君らを見つめる少女がいるかもしない。何処かに、守られるように影の垂れた茂みで心安らかに、眠る野良猫がいるだらう。ひんやりとした土のなかで春を待つ小さな虫たちが、大きな樹に被されて今でも確かに息をしている。

それは、綺麗だらう？ そんな命の姿は綺麗じゃないか。

それなのに、なんで・・・・・。

ひくくざわめく葉っぱが僕の上にあつた。いくら睨んでも、汚れて荒みきつた心をぶつけても、いつまでも僕を見下ろしていた。背中に触れる地面の感触や、空の匂いが蘇ってきた。閉ざしていた何かを溶かした何かが吹いた気がした。

じわりとした熱が涙腺を濡らして広がつた。胸の辺りが満杯になつて揺れた。

捨てたはずなのに。それすらも、中途半端だつたところのか？ や

つぱり、僕は駄目な奴だなあ。

גַּעֲמָנָה . . . ०

「ひつべつ・・・・・」

堪えた臉から、語りかけるように涙が幾筋もはしつた。

僕らは、生きてるんだよ。前に進まなきゃ。その覚悟はあるかい？

ハル・・・・。僕はそのとき・・・・本当にどうしようもなくうれし・・・かつたんだ。悲し・・・さとか・・・責任とか、他に・・あるべきものはたくさん・・・あつたかもし・・・れない・・・。だけど僕は・・・なんでだるなあ・・・・? うれしかつた・・・。な・・んだか・・・また、君に会えたような・・・・気がしたんだ。揺れる葉っぱの中に・・・君が居たような気が・・・。君の・・・風が吹い・・たよう・・・な、そん・・・な気がした。

また、もう一度君と会・・・・・。

血が溢れ出さなくなるとからだに力が僅かばかり戻るのを感じた。起き上がって、道の隅に転がっている犬の元へよろめいて歩いた。僕は、自分に起こっているおかしな事にすこしづつ気付き始めていた。普通とは違う、何かが自分に芽生え始めているのが感じられた。それは感覚や、思考や、温度の違和だった。

それは感覚や、思考や、温度の違和だった。
僕は死なかつた。普通の人間ならば、頭を一撃大岩で殴りつけたら、即死はないにしても出血多量やらで絶命するだろう。なぜ、死なかつたのか、僕は何故生きているのか、どうしてだろう僕は、なんとなくわかつてしまう。

打ち捨てられた飼い犬の最期の姿に近寄つた。

それは犬ではなく、元は犬であつた赤い塊だつた。

悪意の毒を塗りたくつた言葉の刃に、精神を断ち切られた彼女は激昂した。毒は即効性のものだつた。すぐ近くにあつた岩で僕を數度殴りつけ、僕が血を噴出しながら倒れると今度は標的を変更した。気の違つた彼女は叫びながら足元に落ちていた犬にめがけて岩を叩きつけた。何度も叩いた。

彼女が何を思つてこのよだな行動に至つたのか、その真意は解ることはないが、しかしその原因が僕であることは明らかだつた。眩暈がするような感情が僕を襲う。僕は、また何かをどうしようもなく傷つけてしまつた。ハルちゃん。犬。謝る事なんて出来ない。何故、こんなことになつてしまつたんだ。いや、解つていい。僕はそれを知つた。だからこそ、自分を悔いた。よろめく心を支えながらも、しつかりと責め、悔いた。

この小さな犬は自分の一生を生き抜いて終え、そして何の心迷いもなく天国へ上るはずだつた。たつた、大切な小さな、それだけだつたのに。生きた日々に彼の魂を包み守つた肉体は、もしかしたら彼の見る前で、理不尽に、圧倒的な非情さをも持つて碎かれた。眩む様な赤をした強く強く強い思いがあつた。

自分の愛し、信じ縁つた主人にご飯をもらつたこと、おいしかつた。皆がいる中で、言葉をかけられながら体を撫でてもらつた。ああうん、そのときぼくは、生きてて良かつたねつて、ぼくは幸せだつて、もしほくがきみらに話しかける事が出来たらそう言いたかった。だから何度も、あなたを見つめて体をすりよせたよ。そのとき、あなたは笑つていてくれてたよね・・・?

暗む様な紫をした悲しく悲しく悲しい思いが、僕の視線の落ちる先にある彼の姿から有り得ないほど僕の胸を貫いた。

泣きそうに、脆くて脆くて脆かつた心があつた。

人間が叫んだ。だから嫌だつたんだ犬を飼うのなんて家の中で死なれたら困るから。畜生。

やめる。その目をやめる。やめる。やめる。やめる。

怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。目。黒を宿した目。それは、異常だ。清浄でも通常でもない。

壊せ。

「それ」はわたしの邪魔。

深ぶかと切り裂かれ内容物が破裂する閃光が見えた。

「うわああッ

色んな涙が飛び散らかって混じつて　　僕は次の瞬間目を閉じて頭を振った。濃淡の螺旋を辿つて景色に色が復活する。悔やんだり悲しんだりとかそれは、今すべきことなんかじやないだろうと思つて止めたとか、そういう奇麗事を感じる余裕じや無かつた。圧倒的な溢れ暴れる感情の洪水が、全方から僕の四肢を碎くように終結して心を吹き散らした。ちっぽけな僕が許容出来るようなものではない、何かだ。

いや、だからこそ、解つた。これが命の重みだ。それをめぐる生命たちの鎮魂歌、魂の絶叫、この世界で最期のロックンロール。

存在の価値にそぐわないほど軽くなつてしまつた犬の体を抱き上げて見つめた。悲しさに、負けてしまいそうだ。まだ、彼女の行動の意味は解らないでいる。

近くの木の根元の土を掘つて犬を埋めた。犬は小さかつたので、簡単に抉つただけの穴でもすっぽりと収まつた。

僕は、僕の行動の意味も、解らない。永遠に解ることはない気がしていた。

悔やむこと。なみだを流すこと。同情すること。戦うこと。優しくなること。強くなること。

本当に大切なものは、一体この世界に幾つあるんだろう。

世界にとつて、僕にとつて必要なのはどれなんだろう。

さつきまで紫色をしていた月は雲が架かつて見えなくなっていた。

世界は、色を忘れたように黒い。僕の背景に赤い光の線が一本つけ加わった。

獣の羽音に、僕は気が付かない。

—2—（後書き）

怠惰、です。僕の人生の大半は。ギターの弦が切れました。だけど、張り方が解りません。こんな人生は嫌だとおもいます。

そんなわけがあり、この文章も書き終わってから一ヶ月くらいほつたらかしに去れました。可哀想に・・・。次、一週間で書く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5758f/>

～春風パレット～

2010年10月11日15時07分発行